夢喰いバク

断歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢喰いバク

【Ｎコード】
Ｎ３５５０ＢＡ

【作者名】
断歩

【あらすじ】
「嫌な夢を見た時にね。
夢喰いバクさん、この夢を食べてください。
と言えば、その夢を食べてくれるの。」
楓はその日、嫌な夢を見た。それを夢喰いバクに食べてもらい、彼女が望む夢は？
「その代わりに君たちが支払う物は、ただ一つ……皆持っている物だよ……――――」

何回か夢を喰う代償として夢喰いバクが楓から貰う物とは？

1日目　代償？

夢とは凄い。
勇気や希望を与え、道しるべになる。
夢とは凄い。
死人に会わせたり、理想の世界に連れていったりする。
しかし、夢は牙を剥く。
夢はとても嫌なことや悲しいこと見せる。
夢は期待すれば、するほど残酷な現実を思い知らせる。
怖い夢は、見なければいいんだ。
叶わない夢なら、諦めれば良いんだ。
そんなときは、僕の名前を呼んでごらん？
僕がその夢を食べてあげるよ。
心配しないで。
その代わりに君たちが支払う物は、ただ一つ……皆持っている物だよ……――――

私は、同じクラスの友人達と教室に残って噂について話していた。
「ねぇねぇ知ってる？」
「「うんうん」」
「嫌な夢を見た時にね。
夢喰いバクさん、この夢を食べてください。
と言えば、その夢を食べてくれるの。」
「でも、その代わりに呪いとかかけられそう。」
私がそう呟くと、友人達は驚いた表情で私を見た。
「「アハハハハハッ」」
そして、一斉に笑いだした。
「楓、そりゃ無いわ。」

「怖がりすぎよ、楓。」
二人とも私をバカにするから、私はそっぽを向く。
「冗談だってば～。私を見捨てないで、楓さーん。」
涼子は焦って椅子から降りて、私の足にすがる。その様子を、舞は笑いを堪えながら見守る。
「分かった！分かったから！離してって。舞も手伝ってよ～。」
「もう、仕方無いわね。」

「話が戻るけど、何の見返りもなく夢を食べてくれる訳ないと思うんだけど。」
舞の助けを借りて、やっと涼子は落ち着いた。
「あー、そのことかぁ。」
涼子は、頭のタンコブを両手で押さえてうなだれている。
「夢喰いバクの主食は、夢なの。だから、何も代わりに渡す物は無いの。」
「それは私のセリフだー。」
外を見ると、すっかり空はオレンジ色になっていた。
「……そろそろ帰ろっか？」
「「そうだね。」」

「……夢喰いバク……か。」
お風呂から上がった私は、ベットに倒れ込んだ。そして、そのまま目を閉じた。
気がつくと、私は教室の自分の座席に座っていた。

「楓、ゴメンね。」
「どうしたの？」
突然涼子が舞を連れて来て言う。二人とも哀しそうな目をしていた。
「本当に、ゴメンね。」
「だから、どうしたの？」
今度は舞が謝る。私の言葉が聞こえていないみたい。
「「私達のために……死んでぇぇ！！」」
涼子と舞は手を上げた。その手には、包丁がある。
「いやぁぁぁ！」
包丁に気付いた私は、反射的に彼女達から離れた。降り下ろされた二人の包丁は椅子に当たり、椅子が砕ける。
「嘘！！」
彼女達の力は、人間離れしていた。
「「お願いよ、私達のために死んでぇぇぇ！！」」
二人は机と椅子を吹き飛ばしながら走って私を追いかけてくる。私は廊下に出て、ひたすら逃げる。
走って走って走って走ってひたすら走る。けれども彼女達はひたすら走って、障害物なんて関係無く追いかけて来た。
「（ドン！）なんで！行き止まり！？」
ついに私は廊下の突き当たりに来てしまった。
「「死ねぇぇぇぇぇぇ！！」」
涼子は私の胸元を、舞は私のお腹を狙って包丁を突き立てる。
「嫌！嫌！！嫌嫌嫌いやいやいやイヤイヤイヤイヤ、イヤァァァァァァァァ！！」
逃げられない行き止まりの壁に背中を押されているのを感じる。そんなとき、
「嫌な夢を見た時にね。
夢喰いバクさん、この夢を食べてください。
と言えば、その夢を食べてくれるの。」
涼子の声が、頭に響いた。

「夢喰いバクさん、この夢を食べてください！」
「ハイハイ食べますねぇ。」
陽気な声が響いた途端、私の体に触れかけていた包丁の先端から、二人は見えない何かに呑み込まれるように消えた。そして、景色も捻れながら一点に集まり、私は真っ白な世界に取り残された。
「……何が……起きたの？」
「僕が食べたんだよ。」
動揺している私の背後から、陽気な声がした。
「やぁ、はじめまして。夢喰いバクさんで～す。バクさんでいいよ。」
振り向くと白いシルクハットをかぶった、金髪に黄色い瞳の青年が、白と黒のチェック柄をしたステッキを片手に立っていた。
「そういえば、君の名は？」
「楓です。」
「じゃあ、楓。これからも嫌な夢を見たときは、僕を呼んでね。さぁ、見たい夢を思い描いて。」
バクはステッキをクルクルと回しながら言った。
「見たい……夢？」
「そうだよ。見たい夢を考えて。夢を作り直すんだ。死人にも会えるよ？」
「えっ！？」
彼はまだステッキをクルクルと回している。
「夢の中では、なんでも出来る。そう、夢は無限なんだ。だからこそ、夢は美味しい。」
「じゃ、じゃあ、死んだおばあちゃんに会いたい。」
「……まぁいいか。オーケー、それじゃほいっとな。」
彼は指をパチンと鳴らすと彼は消えて、目の前におばあちゃんとお花畑が現れた。
「あぁ、おばあちゃん。会いたかった……」
おばあちゃんに抱きついたとき、どこかからバクの声が聞こえてく

る。
「あー、あと何回か君を助けてあげるけど、その代わりに君が支払う物は、ただ一つ……皆持っている物だよ。だから、安心してね……――――」
そして、私は目覚めるまでおばあちゃんと共に過ごした。

1日目　代償？（後書き）

読んでいただきありがとうございます

活動報告に書いてた予告みたいなのが早速実現した気がしましたけれど、途中からアイデアが増えたので

とりあえず続きを待っててください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3550ba/

夢喰いバク

2012年1月9日05時53分発行